

Title	張鷟『朝野僉載』について
Sub Title	A study of Zhangzhuo "Chaoye qianzai"
Author	溝部, 良恵(Mizobe, Yoshie)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.16 (2023.) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20230331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

張鷟『朝野僉載』について

溝部良恵

はじめに

『朝野僉載』は、唐代高宗期から玄宗期に在世した張鷟が、当時の朝野に起こった出来事を記した書である。書名の「僉」とは、「全て」という意味であり、文字通り、武后期を中心とした政治の腐敗ぶりを鋭く批判した話や死者の再生や鬼の出現などについて記した所謂志怪風の話まで、様々な階層にある人々の多岐にわたる話が収められている。こうしたことから、現在では一般的に『朝野僉載』は、歴史と小説の間にあるような書物と看做され、歴史書としてあるいは小説として、それぞれの角度から『朝野僉載』の特色を明らかにする試みが行われ、成果を上げているが、それらを統合し、『朝野僉載』はどのような性質をもつ書といえるのかということに関して、また小説史上の位置づけについても、まだ考察の余地があると思われる。本稿では、以上のことを念頭に、『朝野僉載』の分析を試みてみたい。

一・張鷟について

張鷟自身の伝は両『唐書』には立てられていないが、『旧唐書』卷一四九及び『新唐書』卷一六一に張鷟の孫、張薦の伝があり、張鷟についての記述も見られる。そのほか現存の資料として、中唐劉肅撰『大唐新語』及び晚唐莫休符撰の『桂林風土記』に収められた張鷟に関する記述がある。また『朝野僉載』の中にも、張鷟が自身の経歴に触れている話がある。⁽¹⁾ まずこれらの資料を中心として、張鷟の生涯を概観してみたい。⁽²⁾

張鷟、字は文成、号は孚休子、深州陸沢（現河北省深県）の人。五胡十六国の一つである石勒の建てた後趙の重臣であった張賓の末裔であるという。幼い頃より、優れた文才を発揮し、弱冠の頃に「下筆成章」という制科に応じ、擢第した後、寧州襄樂県（現甘肅省寧県の東北部）尉、監察御史、司門員外郎の職を歴任した。玄宗の開元初め、宰相姚崇に疎んぜられ死を賜ったが、息子の陳情を受けて、張廷珪、李日知がとりなし、死を免れ嶺南に流される。数年後龔州長史となり、後七十三歳で卒した。張鷟は、七度科挙に応じ、四回選拔され、皆甲科で受かったという。張鷟の文名は、唐王朝のみならず、突厥や日本、新羅にも知れ渡っており、来唐した人々は張鷟の著作を競って買い集め、本国に持ち帰ったという。

『登科記考』によれば、「下筆成章」は、儀鳳二年（六七七年）に行われた制科であり、その頃弱冠、すなわち二十歳前後であったとすると、張鷟は高宗期のはじめ、顕慶年間（六五六年～六六〇年）前後に生まれたことになる。ところで、張鷟が応挙した年については、『新唐書』では「調露（六七九年～六八〇年）初、登進士第」とあるが、洪邁『容齋統集』卷一二「龍筋鳳髓判」の条では、『登科記』⁽³⁾ という書を引き、上元二年（六七五年）説を唱

え、『新唐書』説を否定している。^④また『旧唐書』においても、「初登進士第一（中略）——又応下筆成章及才高位下科、詞標文苑等科」としており、さらに『朝野僉載』卷三「張鷟」（『広記』卷二七七）にも、「鷟初举進士，至懷州」とあることから、張鷟は下筆成章科とは別に進士科に合格していたようである。

唐代においては、宋代以降に確立された進士科のみの科挙制度とは異なり、多くの科目によって、選抜が行われていた。明経科や進士科といった常科とよばれる常設の科とは別に、皇帝によって特別に設けられる制科の制度があった。制科は、はじめ皇帝が口頭で試験を行っていたが、高宗の顕慶三年（六五八年）頃から、筆記による試験を開始し、進士科、明経科と並ぶ唐代の科挙制の主要なコースとなっていた。制科では、皇帝の求める人材によって、科目が作られた。『唐会要』によれば、唐代を通じて、十人の皇帝によって、三十九回にわたり、六十三科目ほどの制科が実施されたという。制科の目的は、皇帝の必要に応じ、迅速に広く人材を集めることにあつたので、六品以下の現職官、任官待ちの前進士^⑤、職を離れている前資官などが、積極的に応挙していた。張鷟が受けた下筆成章科もこうした制科の科目の一種であつた。また張鷟は、両『唐書』によれば八回、『順宗実録』、『大唐新語』、『桂林風土記』、『独異志』によれば七回の制科を受けており、神龍二年（七〇六年）には、才膺管楽科及び才高位下科に、景雲二年（七一年）には賢良方正科に、また時期は不明であるが詞標文苑科に応じたという記録が残っている。^⑥

次に張鷟の任官について、整理してみたい。唐代の科挙制においては、進士科や明経科は、礼部における試験であり、実際に任官するためには、さらに吏部の試験を受けなければならなかつた。しかし制科においては、任官もすぐに行われていたという。『桂林風土記』によれば、張鷟は下筆成章科を受けた後、「中書侍郎薛元超、特授寧州襄楽県尉」とある。寧州襄楽県は、現在の甘粛省寧県の東北部にあたるが、張鷟のもう一つの著作として名高い

『遊仙窟』の題辞には「寧州襄樂県尉張文成作」と見え、この作品が若い頃に書かれたものであったことがわかる。この後の任官についても、まとまった記述はなく、『桂林風土記』、両『唐書』、『朝野僉載』などから知ることができ。以下各書に書かれた張鷟の任官についてまとめてみたい。

職種	任官時期	根拠
寧州襄樂県尉	儀鳳二年（六七七年）張鷟二十二歳頃	『桂林風土記』
監察御史	長寿（六九二年）六九四年）中 張鷟三十五歳～四十歳頃	『新唐書』「劉奇伝」
処州司倉	久視元年（七〇〇年）或いは長安（七〇一年）七〇四年）初 張鷟四十歳～四十五歳頃	『大唐新語』卷八 『朝野僉載』卷二
柳州司戸	長安初	『朝野僉載』卷二
德州平昌令	長安元年	『朝野僉載』卷二
長安尉	景雲元年（七一〇年）頃 張鷟五十歳頃	『桂林風土記』
岐王府參軍	景雲二年（七一年）	『朝野僉載』卷一、卷二および『容齋統集』卷一
鴻臚寺丞	景雲二年（七一年）	『朝野僉載』卷一、卷三および『容齋統集』卷二二
嶺南へ左遷	開元二年（七二四年） 張鷟五十五歳頃	『朝野僉載』卷一
冀州長史	開元八年（七二〇年）頃 張鷟六十歳頃	『桂林風土記』
司門員外郎	開元中	『旧唐書』

他に任官年の不明な官職として、河陽令（『朝野僉載』巻五）、洛陽令（『大唐新語』巻八）がある。以上が各書からわかる張鷟の任官状況である。若い頃から文名を得ていたものの、官職としては、主に六品官である県尉、司戸などにとどまっている。さらに、武后期久視元年から長安年間初めにかけて、処州司倉に左遷されたのち、柳州司戸、德州平昌令と短期間に任地を移り、玄宗の開元初めには、嶺南に左遷されており、張鷟の官人としての経歴は、平坦なものでなかったことがうかがわれる。開元年間の左遷については、『旧唐書』によれば、張鷟の性格は「性褊操，不持士行，尤為端士所惡」、『新唐書』によれば、「性躁下，儻蕩無檢，罕為正人所遇」であったため、宰相の姚崇に疎まれたためだとされる。

以上のように、張鷟は高宗期から玄宗の開元年間の前半期まで在世したが、張鷟の三十代から四十代にあたる高宗期には、政治の実権は、皇后である武后が握っていた。さらに高宗の死後、中国史上はじめて、女性として武后が皇帝にまで上り詰め、国号も周と変え、唐王朝が実質上一時断絶するという特異な時代にあたっていた。近年では、武后は、狄仁傑など優秀な科挙官僚を起用し、貴族制によらずに、実力により人材登用をした点などを再評価もされているが、一方で薛懷義や武三思、張易之などを寵愛し、彼らが権勢を振るうことを許し、政治に腐敗と混乱をもたらした点も看過できない。張鷟自身は、『朝野僉載』において、武后に阿り、権力を握っていた人々の理不尽な行いを記し、繰り返し批判している。このように自身の直言を辞さない性格のためか、幼い頃から、神童として名を馳せながらも、目立った官職につくこともできず、五十歳をすぎても制科を受け続けていたことから張鷟にとって、官吏としての人生は満足のいくものではなかったものと思われる。

二二 『朝野僉載』のテキストについて

次にテキストについて検討したい。『旧唐書』『芸文志』には、『朝野僉載』の名は見えない。『新唐書』『芸文志』では、「史部雜傳記類」に「張鷟朝野僉載二十卷自号浮休子」とある。『宋史』『芸文志』では、「史部傳記類」に「朝野僉載二十卷」とあり、さらに続けて「僉載補遺三卷」とある。『補遺』の書名は、尤袤『遂書堂書目』、馬端臨『文獻通考』などにも見られることから、宋代には『朝野僉載』に倣い後人によって著された書があったものと思われる。『朝野僉載』の逸文を多く収める宋太平興國三年（九七八年）成立の『太平広記』には、明らかに張鷟の死後の出来事について記した話もあるが、『朝野僉載補遺』の書名は、『太平広記』中には見られない。『太平広記』編纂時に、『朝野僉載補遺』が成立していたか否か速断はできないが、『太平広記』中には、『朝野僉載補遺』の逸文は含まれていないものと思われる。

この『補遺』については、晁公武『郡齋讀書志』に「朝野僉載補遺三卷、右唐張鷟文成撰、分三十五門、載唐朝雜事」という記述がある。これによると『朝野僉載補遺』は三十五部門に分かれていたようである。上記したように『補遺』が張鷟の著である可能性は低いと思われるが、周勛初氏は、宋の王楙『野客叢書』卷三十に龔養正『統釈常談』という書物からの記事を引き、「見『朝野僉載・俗諺篇』」とあるのは、晁公武の説を裏付けるものとし、『朝野僉載』原本でも、部門が分かれていたのではないかとする。¹⁰⁾

また『直齋書録解題』には、「其書本三十卷」であったと記されているが、大方の書目が二十卷としてることから、原本は二十巻であったと考えられる。

しかし原本は、その後散逸したものと考えられ、『四庫全書総目』「小説家・雑事類」には、「朝野僉載六卷」と記されている。この『四庫全書』に収められた六卷本とは、明の陳繼儒による叢書『宝顏堂秘笈』に収められていたものに基づく。この六卷本の内容は『太平広記』所収の『朝野僉載』の逸文を集めたもので、『太平広記』に収録されている四百条あまりの逸文のうち三百七十条あまりを収める。例えば巻一には、主に『太平広記』巻二一六～巻二二〇、巻一六二～巻一六五、巻一四六～巻一五〇、巻一三七～巻一四〇の順に約八十条近くの話が収録されている。『太平広記』の巻数の並び方は恣意的であるが、各話の配列は、『太平広記』と一致する。

余嘉錫『四庫提要辨証』巻十七には、このほかに十巻鈔本が存在したことが記されている。余嘉錫によれば、この十巻本は、六巻本と同じ内容を持ち、六巻本の巻一～三が十巻本の巻一～巻五に、六巻本の巻四～巻六が、十巻本の巻六～巻十に該当するという。趙守儼氏は、現在国家図書館に所蔵される五巻本の『朝野僉載』は、『四庫提要辨証』の記述からみて、余嘉錫が見た十巻本の残本であると指摘する¹¹⁾。また日本の静嘉堂文庫にも、十巻鈔本(年代不詳)がある。福田俊昭氏によれば、六巻本と静嘉堂蔵鈔本は、「収録説話の配列を同じくし、多少の出入りはあるものの、所収録話の数もほぼ同じ」であるという¹²⁾。十巻本には、各話に篇名がつけられており、趙氏及び福田氏の記述から、国家図書館蔵本と静嘉堂文庫本の内容が一致することが確認できるので、この二本は同系統のものと考えられる。

『太平広記』、六巻本以外にも、『資治通鑑考異』(二十六則)及び『類説』(六十七則)、『説郛』(三十八条)などの類書にも逸文が残されており、『太平広記』には見られない話も収録されているが、節録であるものが多い。

以上のように、現存する『朝野僉載』の逸文の中では、『宝顏堂秘笈』所収の六巻本が、比較的原本に近い内容を持つと思われる。この六巻本を底本として、趙守儼氏による校勘と『説郛』などの逸文を加えた『朝野僉載』¹³⁾が

中華書局より出版されており、現在最も信頼できるテキストとされている。本稿では、この中華書局本を底本として用いることとする。また『太平広記』については、中華書局本及び張国風会校『太平広記会校』を適宜参照した。¹⁴⁾

三、先行研究及び問題の所在について

次に『朝野僉載』について、歴代の書目における分類を簡単に整理してみたい。¹⁵⁾

『朝野僉載』が最初に記載された書目である『新唐書』『芸文志』においては、「史部雜伝記類」に分類されていた。周知の通り、『新唐書』『芸文志』においては、『隋書』や『旧唐書』において史部雜伝類に分類されていた『搜神記』、『幽明録』などの志怪書が、子部小説家類に分類されるようになった。その中で『朝野僉載』は、歴史書として認識されていたと考えられる。しかし『新唐書』以降の宋代の主な書目、『郡齋讀書志』、『通志』、『芸文略』、『遂初堂書目』、『直齋書録解題』などでは、小説に分類されるようになる。また宋の洪邁は、「僉載紀事，皆瑣言摘裂，且多嫠語」(『容齋統集』卷二)として、『朝野僉載』の内容の信憑性に対して厳しい評価を下している。しかし『宋史』『芸文志』では「雜記類」に、さらに明代の『世善堂藏書目錄』においても「稗史野史并雜記」類に分類されており、なお歴史書と看做す書目もあった。『四庫全書提要』では「小説家類」に分類した上で、「其書皆紀唐代故事，而於諧噱荒怪纖悉臚載，未免失於纖碎。故洪邁容齋隨筆譏其記事瑣屑摘，且多嫠語。然耳目所接，可掬者多。故司馬光作通鑑亦引之。兼収博採，固未嘗無裨於見聞。」と評し、一部は歴史書と看做せるが、中には信用できない話も含まれているという『朝野僉載』に対する評価をまとめてみる。

近代以降、西洋の小説(novel) 觀の影響を受け、中国小説史が構築されていく。六朝から唐代にかけては、事

実の記録であった六朝の志怪から虚構を駆使して描かれた唐代の伝奇へと変化していったとされている。そのような中で、『朝野僉載』を小説 (novel) として見做す見方もある。例えば侯忠義氏の『隋唐五代小説史』¹⁶においては、『朝野僉載』は、第六章「唐代軼事小説」で取り上げられ、于偉娜「張鷟小説研究」¹⁷では、『朝野僉載』を小説の観点から考察している。程毅中『唐代小説史』では、「遊仙窟附朝野僉載」としてとりあげ、初唐期における『朝野僉載』の小説的な価値を認めながらも、小説史の中で一項目をたてて扱うことはせず、小説史の史料として言及するにとどまっている。また唐、五代の小説研究の基本書である李劍国氏の『唐五代志怪伝奇序録』¹⁸には、『朝野僉載』は収録されていない。一方黄永年、周助初氏などは、『朝野僉載』を歴史書として扱う立場をとる。¹⁸さらに王元元『朝野僉載』的資料価値研究¹⁹や盛亮『朝野僉載』研究²⁰では、新旧『唐書』、『資治通鑑』、『資治通鑑考異』との詳細な比較を通じ、『朝野僉載』の歴史書としての価値について考察している。

以上の各研究は、小説 (novel) としての要素、歴史書としての要素をそれぞれ『朝野僉載』の中に見出すことで、『朝野僉載』の特色を明らかにすることに成果をあげているが、一方で、張鷟が『朝野僉載』を著した意図とは必ずしも合致していないようにも思われる。例えば、小説的な要素を評価するという観点からいえば、細かな描写を持つ話が注目されるが、高宗期から玄宗期の世相を広く記したという『朝野僉載』の重要な性質を見落とすことになりかねない。また歴史書として評価する観点からいえば、誇張された文章や鬼神のことについて触れられた文章は、根拠のない話として退けられてしまう。歴史書か小説かといういずれかの基準でのみ分析するのではなく、むしろこれらの成果を踏まえながら、『朝野僉載』とはいかなる性質を持つ書物なのか、その点を考えることが重要なことと思われる。

四. 『朝野僉載』の内容について

『太平広記』の分類を参考に、現存する『朝野僉載』の全体の内容を把握してみたい。(括弧内の数字は、話数)

異僧(4) 報応(21) 徴応(35) 定数(15) 感応(1) 讖応(24) 廉儉(6) 気義(1) 知人(1) 精察(9)

幼敏(2) 器量(3) 貢拳(1) 銓選(3) 将帥(1) 驍勇(6) 豪侠(1) 博物(1) 文章(2) 才名(3) 楽

(2) 書(1) 画(1) 卜筮(4) 医(13) 伎巧(9) 器玩(4) 奢侈(7) 詭詐(8) 諂佞(10) 謬誤(3) 治

生(10) 編急(3) 詼諧(4) 嘲諷(15) 嗤鄙(29) 無頼(11) 軽薄(1) 酷暴(25) 婦人(8) 童仆(1) 夢

(8) 巫(6) 幻術(10) 妖妄(11) 神(2) 鬼(5) 妖怪(5) 精怪(1) 再生(3) 冢墓(4) 銘記(2) 山

(1) 石(3) 宝(1) 草木(3) 龍(1) 虎(2) 畜獸(10) 狐(3) 蛇(7) 禽鳥(14) 水族(6) 昆虫

(2) 蛮夷(3) 雜録(4) (計四百二十六条)

この他に中華書局本には、他書からの逸文が三十三条収録されている。また趙氏が遺漏した逸文も数条あることが指摘されているが、それらは適宜参考にしていきたい。

『太平広記』は、全部で九十二の分類にわけられているが、そのうちの六十七の分類に『朝野僉載』の話が収録されている。例えば、『太平広記』巻二一八から巻二二〇「医」におさめられる医療に関する話として、当時の名医に関する話(「張文仲」『広記』巻二二八、中華書局本巻一)や薬に関する話(「雜説薬」『広記』巻二二〇、中華書局本巻一)、奇病に関する話(「崔爽」、「崔融」いずれも『広記』巻二二〇、中華書局本巻一)、武后のような皇帝や自身と同じ官僚についての話、あるいは様々な商売を行う人々の話(「何明遠」、「羅会」いずれも『広記』巻

二四三、中華書局本卷三）、異民族に関する話、「河南妖主」、「梁州妖主」いずれも『広記』巻二四三、中華書局本卷三）などが収められており、まさに書名の通り、朝野にわたる様々な話が収録されていることがわかる。

また『朝野僉載』に収められている話は、ほとんどが唐代についての話である。唐代のものとは判明する話は、全部で百四十六条ほどあり、さらにそのうちの十八話が高宗期、七話が睿宗期、六十八話が武后期、四話が中宗期、十一話が玄宗期の話であると判明している。張鷟自身が生きていた時の話、とりわけ武后期の話が多いことがわかる。唐代以外の話と判明するものは、隋八話、北朝七話、南朝三話である。

話の背景となる場所は、唐全土にわたっているが、長安、洛陽などの都や張鷟の本籍地である深州近辺に位置する瀛州、定州、滄州の話が各十話前後ある。一方任地であった寧州、処州、柳州、德州については、一―三話とあまり多くないが、晩年に流された嶺南については二十五話ある。『朝野僉載』は、二十巻という大部の書であり、恐らく張鷟は、長い時間をかけてこれらの話を書き記したものと思われるが、背景とする地名に偏りがあることから考えると、晩年の嶺南において、比較的熱心に記したものと思われる。

『朝野僉載』には、人物に関する逸話が多いが、最も多く名が見られるのは、武后である。全ての話の中で中心的な役割を果たしているわけではないが、三十五話に登場する。武后の次に多いのが、作者張鷟の登場する話（二十一話）である。これは「韋氏」（『広記』巻一四八、中華書局本卷一）のように、中宗の皇后韋氏が玄宗によって廃された際に、韋氏の遠縁のものまで処分が及んだことを批判するなど、自らの意見を書き記した話などが見られるためである。あるいは「張鷟自号浮休子」（『広記』巻一六九、中華書局本卷四）では、張鷟が客の質問に答えるという形で、婁德仁、狄仁傑、李昭徳、武三思、魏元忠など同時代の政治家について、能力、性格を批評するとい

う話もある。

この他には、武后に寵愛を受けた張易之（十九話）、来俊臣（十二話）、武三思（九話）、武懿宗（八話）の暴虐な所業の数々を記した話、あるいは反対に武後に反乱を起こし殺された徐敬業（十一話）などにまつわる話が比較的多い。

五. 暴政への批判

『朝野僉載』には、張鷟が在世した高宗期から武后期及び玄宗前期までを中心に、当時朝廷で活躍した人々にまつわる話が多く書かれており、その多くが、当時の政治への批判となっている。とりわけ武后期への批判が多い。武后は、高宗なき後、一時薛懷義という男を寵愛していたが、薛は次第に武後の寵愛を疑い奇行を繰り返すようになったため武後に殺されてしまう。武後の娘太平公主は、薛懷義を失った武後の寂しさを癒すため、神功元年（六九七年）頃張昌宗という若者を宮中に連れてきた。さらに張昌宗は、兄である張易之を武後に引き合わせ、以後この二人は、武後の寵愛を受け、この張氏一族が宮中で権力を振るうようになった。しかし次第に七十歳を過ぎた武后と宮中で退廃的な遊びに興じる張易之達や張一族の横行に対し、反発する動きが出てくる。武后も高齢のため、衰えを隠せず、そうした動きを抑えられなくなっていた。そして神龍元年（七〇五年）宰相の張柬之らを中心としたクーデターが決行され、武后は廃位となり、張易之兄弟らは殺された。⁽²¹⁾

『朝野僉載』には、この張易之について、権勢をふるった様子が記されている。例えば「張昌儀」（『広記』卷二四三、中華書局本卷三）は、「張昌儀は張易之の権勢をかり自身も権勢をふるい阿るものには、職を与えていた。

ある時薛某というものが、職の幹旋を頼み、昌儀はそれをさらに張錫に頼んだが、張錫は書状をなくしてしまった。かろうじて昌儀が薛という苗字を覚えていたため、薛という苗字のもの六十名あまりに職を与えてしまった」という話である。他にも張易之が権勢を利用して、母親のために、贅沢な品を集めたことが書かれた「張易之」（『広記』卷二二六、中華書局本卷四）、張昌期が道端で気に入った人妻を奪い、追いつがる夫を他の罪で殺した「張易之兄弟」（『広記』卷二二三、中華書局本補輯）など、武后の寵愛を背景とした張氏一族の傍若無人なふるまいが記されている。

また張氏一族以外の多くの酷吏の行動も書かれている。例えば「段崇簡」「崔玄信」（いずれも『広記』卷二四三、中華書局本卷三）や「陳承親」（『広記』卷二六七、中華書局本卷二）には、任地で、人々から金銀財物を取り上げ暴利を貪る官吏の様子が記されている。

あるいは『広記』卷二六七、中華書局本卷二には、私的に権勢をふるい、人肉を食したり、拷問を行う酷吏についての記述が複数篇収められている。「独孤莊」、「索元礼」、「羅職人」、「成王千里」、「李全交」など）その中でも特に「京師三豹」には、李全交、李嵩、王旭の三名が「京師三豹」とよばれ、その凶暴さが恐れられたことが書かれている。各人が行った拷問に、人々は安心した生活ができず、囚人は死を望む（人不聊生、囚皆乞死）というほど過酷な状況であったと記されている。

こうした暴政に対し、張鷟は、記事を記すだけでなく、自らの感想、批評を記すことがある。例えば「元楷」（『広記』卷二六七、中華書局本卷二）は、「元楷は、三代にわたり、密告によって官職を得てきたが、息子は、先天二年、反逆の罪に問われ、一家で流罪にあう」という話であるが、その最後には、「これこそ「積悪の家には、必ず余殃有り（積悪之家必有余殃也）」というものだ」と『易経』を引用し、批判する。『広記』卷二四〇、中華書

局本巻五には、武后あるいは武后の周辺の人々へ阿る人々の姿が多く書かれているが、その中には、その弊害を批判し（「張岌」「偷媚取容、実名教之大弊也」）、教訓とすべき（「薛稷」「后之君子，可不監哉」）との寸評が記されている。

あるいは、「武攸寧」（『広記』巻一二五、中華書局本巻二）「法外な方法で人々から財物を取りたて、人々は苦しんでいたが、ある時財物を取っていた倉庫が雷によって焼きつくされ、武攸寧は脚に腫瘍ができて、数か月苦しんだのちに亡くなる」、「謝祐」（『広記』巻一二五、中華書局本巻二）「謝祐は残忍な性格で知られていた。武后の時に太宗の子、曹王が謝の任地に流されてきたところ、自死をせまった。後に夜に刺客が現れ、謝祐の首を持っていった。後に曹王の家が取り潰しになり調べられると、人の首がでてきた。そこには、謝祐と書かれ、みなは便器がわりにつかっていた」というようなグロテスクな報応の話も記されている。

内山知也氏は、こうした張鷟の姿勢に対し、「権力を振う人物に対しては、その暴虐をさらけ出すと共に、その人間的欠陥・弱点を遠慮なく衝いている」と指摘する²³。

しかし、張鷟が記したのは、権力を振るう人々だけでなく、一般の人に対しても、同じく冷静な視線を向けており、またそこには張鷟の強い正義感が見て取れる。次節では、特に婦人に関する話を取り上げ、考えてみたい。

六. 正妻の機知と嫉妬

『広記』巻二七〇から巻二七四「婦人」には、『朝野僉載』を出典とする話が八話ある²³。「董氏」は、「侯敏は、武后の寵臣来俊臣に阿っていたが、妻の董氏はこれに反対していた。後に侯敏は来俊臣に左遷させられるが、妻の助

言に従い、難を逃れ、また来俊臣の失脚の際にも侯敏は事なきを得た」という話である。あるいは「李奮」は、役所から慣例として米や足代を持ちだしてくる息子の行動を諫め、不正を許さず、罪を親告させる母の話である。「盧献妻」、「鄧廉妻」では、夫の死後、周りの勧めがあっても再婚を拒み筋を通そうとする女性たちの姿が書かれている。

一方で、『広記』巻一〇二から巻一三四「報応」、中華書局本巻二には、嫉妬に関する話が収められているが、「杜昌の妻はとても嫉妬深く、愛妾の指や舌を切り落としてしまった」（「金荊」）、「范略の妻は、夫の愛妾に嫉妬してその耳と鼻をそいでしまった」（「范略碑」）、「胡亮が猿を討伐した際に、一人の女を得た。連れ帰ると嫉妬した婦人の賀氏は、夫の留守中に、女の目に熱した釘をあてた」（「胡亮妾」）、「梁仁裕の妻李氏は、夫の愛妾に嫉妬し、虐待し殺してしまう」（「梁仁裕婢」）など、その多くは、夫の愛妾に嫉妬し、危害を加える妻たちの話である。そしてこの妻たちは、自身あるいは子供が、目が見えなくなったり、頭に腫瘍ができるなど、愛妾に与えたのと同じような苦しみを味わい、報いを受ける。当時、このように正妻の嫉妬によって、凄惨な暴力を受け、亡くなっていた女性たちが多くいたのだろう。しかし一方で、張鷟は、以下のような話も記す。

「任瓌は、太宗から女性を二人賜った。妻は嫉妬して、二人の髪を焼いてしまった。太宗はこれを聞いて妻に酒を与えて、飲めばすぐに死ぬ酒であるが、これ以後女性に嫉妬しなければ、飲まなくてもよい、と言うが、妻は自身は糟糠の妻であり、死んだほうがましだと言い、酒を飲みほした。しかし死ぬこともなく、眠っただけだった。そこで太宗も匙を投げ、二人の女性を別宅に置いた。」（「任瓌」『広記』巻二七二、中華書局本巻三）

任環の妻の話と他の話の違いは、任環の妻は、若い時に支えた夫に裏切られたという嫉妬の理由があり、このことによって、妻は報いを受けず、皇帝の決定をも変更させることになる。このように見えてくると、張鷟は立場に限らず、義を通すことを重んじているように思われる。

このほかにも『広記』巻二四三、中華書局本巻三には、何明遠と羅会という商人や汲み取り業を行う人々の商売に対する考えが記されている。何明遠は、「胡人に従って商売をした。年取って、そのようにしなくなると、家は破産してしまったので、またもとの通りになると栄えた」、羅会は「汲み取り業をして、巨万の富を築いた。ある時友人が訪ねてきたところ、その家はとても立派だった。なぜ仕事を続けるのか尋ねたところ、以前途中で、廃業したら、家がかたむいてしまったから」と答える。恐らく張鷟は、何明遠や羅会の自身の職業に対する本質的な考えが述べられていることを評価したために、この話を記したのではないかと思われる。

以上のように不正、欺瞞を見逃さず、立場ではなく、本質を見極めようとする話が、『朝野僉載』において、大きな割合を占めている一方で、『朝野僉載』には、多くの「定数」、人の定めに関する話が含まれている。そして張鷟は、こうした話を自身も信じ、熱心に記録していたふしがある。次節ではこの点について考えてみたい。

七. 官職へのこだわり

『朝野僉載』には、『広記』「徴応」、「定数」、「感応」、「讖応」、「夢」などに分類される、自然現象ややはり歌、特異な出来事などに物事の予兆を見る、あるいは出世、失脚などの定めを知る、という話が多数ある。

そのような中で特に注目に値するのは、『広記』「夢」(巻二七七、中華書局本巻三)を中心に書かれた夢を解釈し、

自分の官職を知ろうとする話である。

「陳安平」 十一月に養蚕（冬絲）をしている夢を見る。「冬絲」 〓 「東司」 音の類似から次の役職が「東司」と予測される。

「李瞿雲」 李瞿雲が、任期が終わった夜、猪の母親を夢に見た。「母猪」 〓 「屯主」ということであり、次の役職であると解釈される。

「裴元質」 裴元質は、科擧の試験前夜に犬が穴から出てきたので弓で撃つとあたったという夢をみた。縁起が悪いのではないかと心配になり、曹良史にたずねたところ、自分もそのような夢を見たことがあり、夢の中で神様が、これは「第」字にあたりと解釈してくれたという。その後解釈の通りに、合格した。

「張鷟」においては、「張鷟自身が、夢に大きな紫色五色の鳥を見て、祖父は、それを吉祥と判断し、将来は、皇帝を補佐する位にまでのぼると喜ぶ。また慶雲が身を覆ったという夢を見たのち、賽味道に天下第一の文章と褒められ、夢に見た通りの官職について」と記されたり、「開元二道士」（『広記』巻二一六、中華書局本巻一）では、「二人の道士が張鷟の運命を占ったところ、大罪を受けて、死に至るという結果がでる。その通りになるが、友人の嘆願で、嶺南に流されることで免れた」という話が載る。「來婆」（『広記』巻二八三、中華書局本巻三）では、張鷟自身が見た琴をつま弾きながら占いをする女性の様子が詳細に記され、「夏文榮」（『広記』巻三二九、中華書局本巻二）においても、張鷟が友人とともに官職を占ってもらっていたことが書かれている。また張鷟は「方知官皆由天」、「授判冥人官」（『広記』巻一四六、中華書局本巻六）、「官職祿料由天者、盖不虛也」（『魏徵』『広記』巻

一四六、中華書局本卷六）のように官職も天の定めによると記したり、時には「あなたは一品、来年は一品、その次は三品と毎年出世していきますよ」と官僚制度もわからずにためを言う怪しい古い師のことを批判する態度を見せることもあるが（『何婆』『広記』卷二八三、中華書局本卷三）、日々自らの官職を気にかけて、そのために夢や占いを信じ、その結果に一喜一憂していたからこそこうした話を多く記していたのではないかと思われる。

一方で張鷟は、「張文成」、「鄭愔崔湜」（いずれも『広記』卷一八五、中華書局本卷一）、「斜封官」（『広記』卷一八六、中華書局本卷一）において、武后当時の科挙制度では、賄賂や「斜封官」と呼ばれる売官制度が横行していたことを鋭く批判している。

これまで見てきた話しにも見られた公正に善悪を判断しようとする理性的な姿勢は、夢や占いという不確実なものも信じているかのような姿勢と一見相容れないものに見える。内山知也氏は、張鷟は「正義感に満ち、自然の理法に随い、人間の自主性を堅持し、人間の生活を直視する人である」とする一方で、「彼もやはり時代の宗教信仰と無縁ではありえず」、「彼の耳目に接した神秘的宗教的事件を、彼の信仰の許す範囲において是認尊敬し、許さぬ点についてはその実情を批判している」としている²⁴。

しかし必ずしも、これらにははつきりと分かれるものではないのだろうか。後ろ盾のない新興の科挙官僚である張鷟は、唐王朝の繁栄を願う官吏の一員として、それゆえに、武后達の不正を許さず、その専制に対し、厳しい批判の目を向けていた。酷吏に関する文章は、そのひどさを克明に記すほど、真面目に国家を支えようとする官吏達の怒りを伝え得たのではないだろうか。そしてその一方で、その繁栄を支えるために、官吏として恵まれた立場にいたとはいえない張鷟は、より中枢に近い立場になりたいと願い、あるいは家柄にとらわれず、実力本位で

ある分、国家の繁栄が自身や家族の生活や将来に直結するからこそ、少しでもよい官職を得ようと夢の解釈や占いに夢中になっていたのではないだろうか。冷静に鋭く当時の政権を批判することと、自分の官職にこだわり、夢や占いの話を記すことは、張鷟自身の中では、自然とつながっていたのではないだろうか。

八. 『朝野僉載』と『遊仙窟』

以上を踏まえて、改めて『朝野僉載』とはどのような性質を持つ書であるのかを考えてみたい。

それまでの類似の書物と比較して考えた時、大きな特徴といえるのは、張鷟の視点で話が収集されている、ということではないだろうか。

例えば梁代の殷芸『小説』にも同じように、史料として評価できる話と信憑性に疑問のある怪異などの話が含まれているという。『小説』は武帝の勅命を受けて、編まれたものであり、また内容も他書からの引用が多く、秦から南朝の劉宋までの話が時代順にまとめられている。

それに対して、『朝野僉載』では、張鷟と同時代の話が大半を占める。張鷟にとっては、今、現在、唐代で起こっている出来事を記し、自分の意見を記すことが大切だったのである。このことに関し、内山知也氏は、「張鷟は、当時の士人の間に話題となっていた人物の言行について、自己の判断と解釈を持ち込み、それを読者に伝えようとした最初の人物であったと言えよう」と指摘している。そしてそのみならず自身の意見が書かれていない話であったとしても、そこには張鷟の目線と価値観が反映されていると考えるのではないだろうか。

例えば第六節で取り上げた嫉妬する正妻たちの話では、嫉妬のために夫の愛妾に残酷な仕打ちをする女性たちは

必ず報いを受けた。しかし本来その原因を作った夫たちが報いを受けたとの記述はない。これらの話が記された背景には、悪事には必ず報いがあるという考えはあっても、異常な行動をとらざるを得なかった妻たちの苦しみ、悲しみを思いやることはない。それが張鷟をはじめとする当時の男性たちの普通の感覚だったのだろう。

そしてさらに張鷟が社会をとらえた視点を考えるときに、張鷟が新興の科挙官僚であったという点も『朝野僉載』の性質を考える上で重要な要素と考えられる。このことについては、張鷟のもう一つの著作『遊仙窟』との関係を検討しながら考えてみたい。

妹尾達彦氏は、唐代に科挙制度が定着することによって、中国の社会にもたらされた変化として、「統治階層の構成原理が身分から業績（科挙合格）に転換することで、人類社会で初めて、受験による業績主義の社会に突入し」、「科挙制度の定着とともに、経世済民という儒家的な教養と、詩文作成能力を公私において兼備した文人層（士人層）が、唐代において初めて誕生した²⁶」と指摘する。そしてこのことは、共同体から独立し、努力による階層上昇を可能とする個人を創出させる一方で、受験生である男性知識人たちは、孤独に受験勉強に立ち向かうことになり、大きなストレスを生じることとなる。そうした社会構造の変化を背景に、都へ出てきた受験生たちは、妓女たちとの間で個人と個人の交情、つまり「恋愛」をするようになったと指摘する。そしてそうした科挙受験生と妓女たちの間の恋愛は、唐代の文学の題材となり、多くの作品、特に唐代伝奇のような小説（*novel*）を生み出していく背景になったという。そして妹尾氏がその嚆矢としてあげるのが、張鷟の『遊仙窟』である。『遊仙窟』は、『神仙窟に迷い込んだ張鷟が二人の仙女崔十娘と王五嫂の歓待を受け、一夜を過ごす』という話であるが、二人の仙女は実際は妓女で、遊里での遊びを描いたものといわれる。

『遊仙窟』の中には、張鷟が十娘に対して、自分の出自を説明する場面がある。それによれば、代々名門の一族

で、進士科に主席で合格し、さらには制科を受け上位の成績で合格したが、自らは父祖の偉業を継ぐことができず、県尉など下級の官吏に甘んじているという。多少の誇張はあると思われるもののこれまで紹介してきた張鷟の実際の経歴とほぼ重なるものである。²⁷『遊仙窟』が描き出すきらびやかな世界や美女との交歓は、現実には不安や不満を持つ科擧の受験生たちや科擧官僚たちにとって、慰めや希望となり得ていたのだろう。あるいはこうした受験生、官僚たちの思いが、『遊仙窟』を生み出したともいえるかもしれない。

一方『朝野僉載』には、唐代を生きた多様な人々の話が書かれ、その一部には、小説 (novel) に発展しそうな話もある。しかし、人々の嫉妬や拷問を描く描写の細かさは、残酷をきわだたせる方向へ進む傾向があり、必ずしも小説に発展するものではないと思われる。しかし『朝野僉載』と『遊仙窟』は、科擧官僚たちが社会に定着していく直前の武后期の社会を張鷟という敏感な感覚と文才を持つ科擧官僚の目によってとらえた書という意味では、同じ根を持つ書と言えるように思われる。

九. おわりに

筆者は、以前、中唐初期に張鷟によって記されたと考えられる『靈怪集』²⁸についての論考を記した。その中で張鷟は、張鷟の孫であり、張鷟の息子の希復は『酉陽雜俎』の作者である段成式と交流があり、さらに希復の妻は、『玄怪録』の作者として知られる牛僧孺の娘であり、この希復と牛僧孺の娘の息子が、『宣室志』を書いた張説であることから、唐代にわたり、張氏一族が小説制作に携わってきたこととその詳細を解明する必要性を指摘した。

本稿で見てきたような自身の目で時代をとらえようとする『朝野僉載』の姿勢は、着実に張鷟たちにも引き継が

れ新たな書を生み出していったものと思われる。張氏一族の小説制作という大きな課題を見据えつつ、『朝野僉載』の他にも上記のような各書の性質をとらえる試みを引き続き行っていきたい。

注

- (1) 『朝野僉載』の逸文において、張鷟が登場する話は以下の通り。「神鼎」〔『広記』卷九七、中華書局本卷六、篇名は『太平広記』による。また括弧内には、『太平広記』における巻数及び中華書局本『朝野僉載』六巻本の巻数を記す。以下同。〕「張鷟」〔『広記』卷一四二、中華書局本卷六〕、「韋氏」〔『広記』卷一四八、中華書局本卷一〕、「張鷟自号淳休子」〔『広記』卷一六九、中華書局本卷四〕、「張鷟」〔『広記』卷一七一、中華書局本卷五〕、「開元中二道士」〔『広記』卷二一六、中華書局本卷一〕、「雜說葉」〔『広記』卷二二〇、中華書局本卷一〕、「趙履温」〔『広記』卷二四〇、中華書局本卷五〕、「朱随侯」〔『広記』卷二五四、中華書局本卷四〕、「宋之慈」〔『広記』卷二六三、中華書局本補輯〕、「張鷟」〔『広記』卷二七七、中華書局本卷三〕、「張鷟」〔『広記』卷二五五、中華書局本卷四〕、「来俊臣」〔『広記』卷二八三、中華書局本卷三〕、「何婆」〔『広記』卷二八三、中華書局本卷三〕、「来婆」〔『広記』卷二八三、中華書局本卷三〕、「薛懷義」〔『広記』卷二八八、中華書局本卷五〕、「夏文采」〔『広記』卷三二九、中華書局本卷二〕、「蝗」〔『広記』卷四七四、中華書局本補輯〕
- (2) 張鷟の生涯に関しては、本文にあげた『桂林風土記』、両『唐書』などの資料のほかに、以下の論考の該当部分を参考にした。竹田復「遊仙窟の性格」(『日本大学編『日本大学創立七十年記念論文集第一巻人文科学編』、一九六〇年所収)、内山知也「張鷟と『朝野僉載』について」(『隋唐小説研究』木耳社、一九七七年所収)、趙守儼「張鷟和『朝野僉載』」(『文史』第八輯所収)、李劍国「唐五代志怪傳奇序録」所収「遊仙窟」の項(南開大学出版社、一九九三年)、湯浅幸孫「張鷟とその著作」(『日本中国学会創立五十年記念論文集編集小委員会編『日本中国学会創立五十年記念論文集』汲古書院、一九九八年)、陶敏、傅璇琮「唐五代文学編年史―初盛唐卷」(遼海出版社、一九九八年)、周助初『唐代筆記小説序録』所収「朝野僉載」(『周助初文集5』江蘇古籍出版社、二〇〇〇年所収)、黄永年『唐史史料学』

- 「雜史雜說小説類」所収「朝野僉載」（上海書店出版社、二〇〇一年所収）、福田俊郎『朝野僉載の本文研究』（大東文化大学東洋研究所、二〇〇一年）、程毅中『唐代小説史』第四章「通俗小説与遊仙窟」「遊仙窟（附朝野僉載）」（人民文学出版社、二〇〇三年）、徐松撰、孟冬補正『登科記考補正』（北京燕山出版社、二〇〇三年）。
- (3) 『登科記』に關しては、どの書を指すか、不明であるが、前掲注(2)湯淺幸孫氏の論考においては、『郡齋讀書志』に「登科記三十卷、樂史撰。記進士及諸科登名者、起唐武德迄天祐末」とあり、宋初の樂史（九三〇～一〇〇七）の書である可能性を指摘している。
- (4) 洪邁『容齋統集』卷一一「龍筋鳳髓判」史云、「調露中、登進士第、考功員外郎饒味道見所對、稱天下無双。」按登科記、乃上元二年、去調露尚六歲。
- (5) 唐代の科擧制については、兪鋼『唐代文言小説与科擧制度』（上海古籍出版社、二〇〇四年）を参照。唐代の科擧では、進士科など各科目の試験を行うのは、礼部であり、さらに任官するためには、吏部の試験に合格することが必要であった。そこで礼部の試験に受かり、進士の資格を得たが、任官を待っているものを「前進士」とよんだ。
- (6) 『唐会要』卷七六。洪邁『容齋統集』卷一二では、神龍元年（七〇五年）とする。
- (7) 『登科記考』卷四引『登科記』
- (8) 洪邁『容齋統集』卷一一
- (9) 『旧唐書』卷一四九及び『大唐新語』卷八
- (10) 周勛初『唐代筆記小説序録』所収「朝野僉載」（『周勛初文集』5）江蘇古籍出版社、二〇〇〇年所収）
- (11) 趙守儼「張鷟和『朝野僉載』」（『文史』第八輯所収）また『北京図書館古籍善本書目』によれば、この五卷本は、明抄本ということである。
- (12) 福田俊郎『朝野僉載の本文研究』（大東文化大学東洋研究所、二〇〇一年）
- (13) 中華書局、唐宋史料筆記叢刊、一九七九年、一九九七年第二版。同書には、程毅中点校『隋唐嘉話』も収められている。
- (14) 中華書局本『太平広記』一九六一年。『太平広記会校』燕山出版社、二〇一一年

(15) 韓雲波『唐代小説觀念與小説興起研究』（四川民族出版社、二〇〇二年）第五節「朝野僉載」小説叙事対歴史叙事の五点突破」では、歴代の書目における『朝野僉載』の分類や現在の小説、筆記研究における『朝野僉載』に対する取り扱いについて言及している。

(16) 浙江古籍出版社、一九九七年

(17) 河北師範大学修士論文、二〇〇五年

(18) 前掲注（2）

(19) 復旦大学修士論文、二〇〇九年

(20) 上海師範大学修士論文、二〇〇九年

(21) 武后時代については、気賀沢保規『則天武后』（白帝社、一九九五年）を参照。

(22) 「張鷟と『朝野僉載』について」（『隋唐小説研究』、木耳社、一九七七年）所収。

(23) 以下引用する話は、『朝野僉載』中華書局本では、いずれも卷三に収められる。

(24) 前掲注（22）

(25) 前掲注（22）

(26) 「恋愛—唐代における新しい両性認識の構築—」（『唐代史研究』第六号、二〇〇二年所収）。

(27) 『遊仙窟』における科挙の影響については、拙稿「張鷟『遊仙窟』と万葉の人々」（『アジア遊学』第九三号、二〇〇六年所収）参照。

(28) 研究ノート「張鷟『靈怪集』について」（『慶應義塾大学日吉紀要中国研究』第十四号）